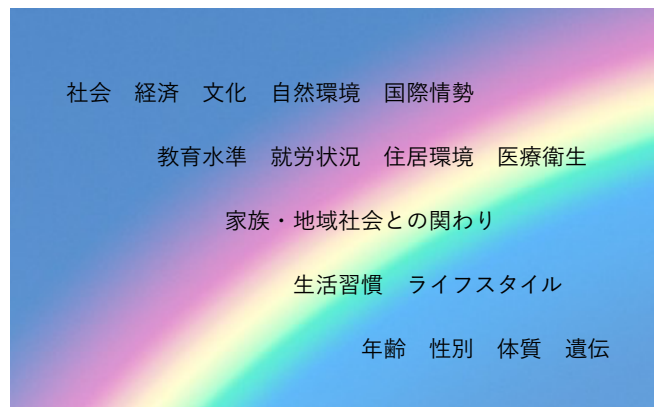


健康と社会経済

育ち働く環境の要因

私たちが生まれ、育ち、働き、年をとる営みのなかで、個人に帰することのできない社会経済的要因によって糖尿病、高血圧、閉塞性肺疾患、関節炎などが生じることが明らかにされています。言うまでもなくこれは公正なことではありません。右上の図は、健康に及ぼすさまざまな要因を挙げたレインボーモデル（Dahlgren G and Whitehead M 1991）ですが、虹の五層のうち外側の四層は社会経済的要因です。



原因の原因

虹の最も内側の層は個人の生物学的要因で直接の病気の原因です。多くの病気の成り立ちには、虹の外側の要因が関わっていて、原因の原因と呼ばれています。生まれる前からの養育環境が病気のリスクになっています。就労している人の収入が高くなるにつれて上に挙げた病気の罹患率が低下することがわかっています。いまや自助努力を旨とする予防と病気の管理の効果には疑いが持たれています。医師が患者の病気になった原因をそのままにして治療することに意味はなく、原因の原因になっている、虹のより外側の要因への働きかけが求められています。

ソーシャル・キャピタル

ソーシャル・キャピタルは、人が人との結びつきによってアクセスできる資源のことです。私たちの行動は周囲の人から影響を受けることがあります。他人の目を気にして振る舞いが変わることもあります。同僚がたばこをやめたから自分もやめるといったことです。信頼や規範が人とのつながりを支えることで職場の大切な資源になります。助け合いが職場を働きやすくしたり、健康的な環境に変えたりすることが示唆されています。英国では孤立や孤独を緩和するための、患者の居場所を確保し、社会関係を維持する医師の処方が普及してきています。

ポピュレーションアプローチ

右下の図に病気のリスクと分布を示します。ポピュレーションアプローチは、集団全体に働きかけて全体としてリスクを下げるものです。これに対してハイリスクアプローチは、リスクの高い人だけを対象にして働きかけます。ポピュレーションアプローチの、普及活動、健康教室、健康増進活動、環境づくり、法整備など、山全体を動かすことは、ハイリスクアプローチの治療や保健指導といった、山の一部を削ることより、集団に対する効果は大きいとされています。

働いているだけで健康になる職場づくり

快適な職場が形成されれば、健康に無関心な人たちも、知らないうちに健康がもたらされます。働きやすい職場では、就労している人は心身に良い行動をとると思われれます。そこでは労働は健康を促進する最大要因になります。WHOのゼロ次予防は、病気の原因となる社会経済、環境、行動の条件の発生を防ぐための対策を取ることを指し示しています。私たちは生活習慣病とされている多くの慢性疾患に対する自己責任論の発想を変える必要があります。

(2023/2/15)

